

「職」をめぐる譲与とその諸要件について

奥　野　義　雄

はじめに

「職」の譲与に焦点をあてた論究は、現階段ではほとんどみられない。この状況は、単に「職」の譲与がかえりみられなかったという事由によるものとは考えがたい。

むしろ、その大きな事由は、所領の譲与にもなった「職」の譲与であり、田畠山野などの所領の譲与つまり所領相続の法的権利の中で論及されていたからであつたと考えたい。

それゆえに、所領の譲与についての論及が先行していたが、数多くの先学諸氏の論考を私たちは共有しているわけでもない。

所領の譲与の代表的な論考として、三浦周行氏の「親子関係を中心としての家族制度」^①と、中田薫氏の「中世の財産相続法」を挙げることができ、いずれもが法制史の視点から所領の譲与が行論されている。すなわち、三浦周行氏は同論稿の「譲与の形式及び効力」で次のように論述されている。

譲・状・は・一・に・処・分・状・と・も・い・へ・り。其形式は一定せず、或は参通に嫡子以下の男女に与へ、或は一通に連書す、後者は総配分状なり。被相続人の自筆に成れるあり、又他筆に成れるあり、病中傭書せしむれば、被相続人自らこれに署名押署し、平復の日更に自筆の譲状を与ふるを例とせり。(中略)。然れども又全く其処分を秘密にして、

被相・統人の死後、五十日の後・披見すべしと遺言せるもあり。其何れもに通じて、処分の効力の生ずるは、被相統人の死後に於てするを例とせり、寛喜二年二月廿日、小山朝政生西の惣領嫡孫長村に与へし讓狀に、「生西一期之間可進退知行也、於没後者、任讓狀、無他妨、長村可令領掌知行」云々とあるは其一例なり。小山文書

と行論されている（傍点・傍線―奥野、以下同様にて略す）。三浦氏の論考では、讓狀すなわち処分狀であること、讓与者の自筆による讓狀あるいは讓与者以外の他筆の讓狀が存在すること、遺言によつて讓与者の死後に讓狀を披見すること、そして讓与者の一期の後に讓狀に任せて被讓与者に所領の領掌・知行させることなどが行論されている。

長文の引用ではあるが、行論されている中でも、もつとも関心をひいたのは死後において讓与が完結するという三浦説である（傍線箇所）。

一方、中田薫氏も「中世の財産相統法」の論考で、

処分は一の生前讓与なりと云ふことも、亦実は処分の通例の場合を見ての説明に過ぎずして、（中略）。何となれば、同じ処分と称する財産讓渡の中にも、生前讓与の外死因讓与あり、又遺言の性格を有するものもあり、（中略）、一見識別し難きものすら存在すればなり。

と行論され、讓与には、生前と死後と遺言による三つの讓与の形態があると提示されている。

三浦氏の死後の讓与と異なり、中田氏の讓与の論旨は生前讓与、死後讓与、遺言讓与の三形態が存在していたことを指摘されている。

三浦、中田両氏の論及には、讓与の理解にいくつかの差異がみられるが、「職」に焦点を当てた論究はなく、田畠山林および家屋などの所領の讓与が中心である。

そこで、ここでは「職」の讓与にかかわる讓与時期および讓与条件（対象者）などを、両氏の所領の讓与の論及

にも留意しながら検討していくことにしたい。

註

- (1) 三浦周行『法制史の研究』所収
- (2) 中田薫『法制史論集』第一巻所収
- (3) 三浦、前掲書

- (4) 中田、前掲書
(補註) 三浦、中田両氏の所領の譲与で考えなければなら
ないことは、譲与(讓状)にともなう公的承認の有無であ
らう。

第一章 「職」譲与の諸相と公的承認

莊園公領制における「職」の補任における基本的な要件として、先祖相伝、重代相伝、相伝譜代、そして開発相伝の寄進行為が考えられるようである。「職」補任と補任の要件については、別の機会に譲ること⁽¹⁾にしたい。

この補任の要件とは別に、「職」の補任状とともに「職」の讓状が数多くみられ、「職」讓状、つまり「職」の譲与にも、単に私的に譲与するのではなくして、公的な承認・認知の存在が窺える。

ここでは、数多くの「職」讓状が示す諸相と「職」の譲与にともなう公的な承認がいかなるものであったのかという「職」の譲与の実態を検討すること⁽²⁾にしたい。

そこで、まず注視すべきことは、「職」の補任が現われはじめた平安時代中頃、とりわけ九〇〇年代中頃以後、平安時代末―別称すれば王朝国家体制の時期の終焉期の一一〇〇年代末―まで、「職」補任にともなう「職」の譲与はみられないのである。

言い換えると、一一八〇年代になって「職」の譲与が史料に現われてくる。たとえば、文治二(一一八六)年八

月 日付の「山氏女讓状案」をみると、山氏女が夫である伊賀法橋の兵庫大夫から「所領美作国布施一処」を讓得されて後、高野御室に所領を寄進した結果、同所領の預所職付帶者となるが、「法橋逝去之刻」に、後家に「職」を讓与し、さらに後家は孫娘に「職」を讓与したという記述がみられる。そして、預所職の寄進にともなつて下司地頭職の付帶者となり、嫡女が「職」の讓与を得たという条々が述べられている。すなわち、

右件社、自兵庫大夫正頼之手、故伊賀法橋被讓得、令寄進高野御室、為預所之職、數十年知行畢、法橋逝去之刻、令讓与後家、後家又讓与孫女子、自件女子之手、依為事縁者讓得、(中略)、奉寄預所之職、於自身者為下司地頭之職、雖經子相々孫々、代々不可更相違之由、(中略)、爰山氏女年漸老、衰耄經日増、(中略)、相副只一人嫡女源氏於次第手繼文書公驗等、永所讓与申也、至于下司地頭之職者、敢不可他妨之狀如件、以讓与、^(有脱之)という記載がそれである(傍線―奥野、以下同様にて略す)。

この讓状案は、「職」の讓与に関する興味深い記述を提示してくれる。たとえば、所領の讓得を受けた伊賀法橋が高野山に所領を寄進することで発生した預所の「職」付帶と法橋死去による「職」の讓与がはじまった。また、預所職の寄進にともなつて下司地頭職付帶が生じて、この「職」の讓与が山氏女の老令化によつておこなわれた。そこには、「職」の讓与には、讓与者の死去による場合と讓与者の老令化による場合があつたという示唆がみられる。ただ、このことについては後述していくこととして、「職」の讓与の様相を窺っていくことにしよう。

すでに、預所職と下司地頭職(下司職・地頭職かは不明)の「職」の讓与をみてきたが、これらの「職」の讓与以外に、どのような「職」の讓与があるのであろうか。

まず、一一〇〇年代末の下司職と地頭職の「職」の讓与の史料を挙げることにしたい。

建久九(一一九八)年八月二十六日付の「平盛相讓状」をみると、

右、件莊者、盛相先祖相伝之私領也、代代手繼明白也、(中略)、限永代所奉讓律師御房也、(中略)、於下司職^(長敷)

者、以盛相子孫、可被補任也、仍奉讓之狀如件、

とあり、平盛相の先祖相伝の莊地（檜牧莊）を律師御房に譲与するに際して、同莊の下司職は盛相子々孫々に補任されることを条件としていたことが窺える。そこには、盛相からその子へ下司職の「職」の譲与を内在させていると考えるべきである。ただ、「職」の譲与の状況は明確にしがたい。

次に同様に建久九（一一九八）年十二月二十日付の「後鳥羽院庁下文」には、

院庁下 松尾社司等

可早任当社前神主相頼法師讓、以祢宜相久・同母因幡知行社領山本・雀部兩莊領主職并私田畠等事、
櫟谷祢宜相久分

（中略）

相久母因幡分

攝津国山本莊年貢米參拾解可〔之、

麓屋地壹所

（下略）

とあり、神主相頼法師が、おそらく子息と妻であつたと考えられる祢宜相久と相久の母である因幡に山本莊（相久分）と雀部莊（因幡分）の領主職を譲与したことがわかる。

そして、相頼法師は松尾社の「社家之繁唱、神事之増加」にともなつて、子息相久と妻因幡に山本・雀部兩莊の「職」を譲与したと想定し得る同じ記述（下略とした記載部分）もみえる。

地頭職の「職」の譲与は、一一〇〇年以降にもみられるので、次に三つほど史料を挙げることにしよう。

史料1、寛喜三（一二三一）年三月二十七日付の「將軍家^{頼經}政所下文案⁵」

「職」をめぐる譲与とその諸要件について

下 乙王丸

可早領知伊予国宇和莊内小立間重實 出羽国秋田郡小鹿嶋内桃川吉田、已上地頭職事、

右人、任親父前薩摩守公業寛喜二年七月日讓狀、可領知之狀如件、

史料2、建長七年（一二五五）年六月五日付の「將軍宗尊親王家政所下文案」⁶

將軍家政所下 平重經

可早領知相模国吉田上莊号渋谷内寺尾村・（中略）・薩摩国入来院内塔原郷以上四至堺各載讓狀等地頭職事、

右、任亡父五郎房定心寛元四年三月二十四日・建長三年八月二十九日讓狀、為彼職、守先例、可致沙汰之狀、

所仰如件、以下

史料3、弘安十（一二八七）年九月八日付の「道心御禪木兼定地頭職讓狀案」⁷

讓与 嫡子次郎時兼

先祖相伝所領周布久満郷地頭職事

右、件久満郷ハ、せんそさうてんのしりやう也、（先祖相伝）

り狀をもて、関東・六波羅殿御ひけんありて、あんとの御下文を申給て、ねん所をふるうゑハ、いきなきか、（私領）

（下略）

史料1と史料2は、將軍家政所の下文（案）によつて、親父の「職」讓狀に任せて地頭職の領知が承認されたことを明示している。この二つの史料から、地頭職を補任されていた前薩摩守公業や五郎房定心の後に、彼らの「讓狀」をもとに子息に地頭職付帯が可能になるためには、地頭職補任者の承諾は必須条件であつたことも窺える。

言い換えると、「職」の讓与には、私的な（個人的な）讓与行為で「職」の付帯ができるのではなく、「職」補任者の承諾つまり公的な承諾なくして「職」の讓与は完了しなかつたことになる。

このことは、史料三にも「下文」によるという明示はみられないが、道心の地頭職讓状をもとに「関東・六波羅殿御ひけんありて」以後に「下文」によつて、「職」の讓与が公的に承認されるという手順を踏むことが窺え、「職」の讓与においては「職」の再補任とも考えられる公的立場が存在していたといえる。

このような事象は、地頭職の「職」の讓与のみに生じるものではなく、地頭職以外の「職」の讓与でも存在するが、この点と併せて史料一と史料二をみるかぎり、讓与主体—この場合は親父である—が、文面からみて生前に「職」を讓与する場合（史料一）と死後に「職」を讓与する場合（史料二）とがあることについては、「職」讓状の様相を検討後に考えたい。

そこで、「職」讓状に立ち戻るが、地頭職以外の「職」の讓与として、どのような「職」が讓状にみられるかを七つほどの史料を次に掲げて窺つていくことにする。

史料①、文治二（一一八六）年九月二十三日付の「平宗家讓状」^⑧

讓・渡・麻・生・公・文・職・并・屋・敷・等・事・

右件所職者、平宗家先祖相伝之私領也、而病悩之尅、嫡男宗貞・永代讓渡進早、（下略）

史料②、正治二（一二〇〇）年正月 日付の「藤原為教讓状」^⑨

讓・与・

萱嶋御莊下司并惣公文職事

藤原能村

右人、讓与件等職実正也、抑於此兩職者、為教先祖相伝之職、敢無相違、（中略）、然而、於今者老令及老耄、動被侵病痼、爰依有事縁、以件兩職、隨讓与于彼能村了、（下略）

史料③、嘉祿三（一二二七）年六月十八日付の「島津忠久讓状」^⑩

「職」をめぐる讓与とその諸要件について

讓与

薩摩国地頭守護職事

左衛門尉惟宗忠義

(下略)

史料④、寛元五(一二四七)年三月十一日付の「比丘尼菩薩房讓狀」^①

讓渡嫡子上總法橋栄尊、薩摩国満家院内比志嶋・河田・西俣・城前田・上原園、

已上五箇所名主職事

右、件五箇所名^(主職者)、任相伝、菩薩房当知行也、(中略)、於于今者讓与彼五箇所之名主職田畠於栄尊畢、

(下略)

史料⑤、弘安九(一二八六)年閏十二月 日付の「中司某下文」^②

可早任藤原氏女讓、以金王丸為權司職事

右、件職者、藤原氏女重代相伝之所帶也、(中略)、且任氏女讓、以金王丸、所被補任彼職也、(下略)

史料⑥、正和二(一二三三)年□月十日付の「源拳田地屋敷処分狀」^③

讓与 処分狀事

(中略)

右、件所領者、<sup>源拳、于時
法名淨覺</sup>重代相伝私領也、而□狀於田地在家者、子息久曾寿丸、限永所讓与実也、□外之

於惣領職者、嫡子与三仁所讓与也、兄弟無相論領知也、(下略)

史料⑦、元応二(一二三〇)年四月十日付の「金太助康申狀」^④

欲早任伯父金太伊賀孫太郎重康讓状、(中略)、同国金太郷惣判官代職并長曾祢郷郡司職等事

(中略)

右、両職者、自重康曾祖父刑部丞憲清以来代々相伝所領也、而伯父重康以助康為養子、去元応二年四月十日相副御下文等、讓与之条分明也、(下略)

史料①から史料⑦までの「職」の讓与の状況をみるかぎり、「職」の讓与にとどまるもの(史料①・②・⑤・⑥・⑦)と「職」とともに所領田畠などの讓与を含むものが窺える。また、史料⑦の記述から「職」の讓与と所領の讓与の対象者が異なることもわかる。

さらに、七つの史料によるかぎり、「職」の讓与には、公文職(惣公文職)・下司職・守護職・名主職・惣領職・惣判官代職・郡司職などあり、莊園公領における莊官や官人などが補任される「職」すべてを讓与対象としていたといっても過言ではあるまい。

なぜなら、公文職以下七件の「職」以外にも「職」の讓与がみられるのである。

その一つに刀祢職の讓与がある。建永二(一二〇七)年十月十七日付の「服連某刀祢職讓狀」がそれで、「永讓渡進」⁽¹⁵⁾「二見郷刀祢職之事」という文言がみられる。

また、田所職の讓与が、建長七(一二五五)年五月十六日付の「沙弥某所職讓狀案」にみえ、「讓与、備中国新見莊田所職事」⁽¹⁶⁾とある。

そして、文永三(一二六六)年四月七日付の「善阿弥陀仏地主職讓狀」には、「讓進 重代相伝所領東寺御領田地主職事」⁽¹⁷⁾とあり、地主職の讓与が窺える。

さらに、名主職の讓与が、永仁三(一二九五)年三月二十日付の「法印某書下」に「真光院領花園内田地式段名主職事、任重阿讓狀之旨、知行不可有相違」という文言にみえる⁽¹⁸⁾。

このようにあらゆる「職」が所領の田畠と同様に、讓与の対象であつたと考えている。史料1・2・3とともに

史料①⑦にみる「職」、さらにさきに掲げた三つの史料の「職」以外にも、領家職・作所職などの「職」の譲与の存在がわかる。

したがって、「職」の譲与は、荘園公領下で醸成されてきたあらゆる「職」補任を基盤にしたもので、すべての「職」を対象とする様相を呈していたといえる。

では、さきの史料1と史料2でみた「政所下文」が示すように、「職」の譲与は公的承認を得ることによつて、公的な「職」付帯者になり得るものかを、もう少し詳しく次にいくつかの史料を掲げながら検討を加えていくことにしよう。

まず、一二世紀末の「職」譲状にともなう公的承認を示す史料を挙げることにする。それは、建久九（一一九八）年十二月二十日付の「後鳥羽院庁下文」で、そこには領主職の譲与にともなう承諾が明示されている。すなわち、「早任相頼法師譲、以相久・同母因幡等、可令知行件兩莊領主職并私田畠等之状、所仰如件」という記載がそれであり、すでに領主職の譲与の一例として掲げた史料である。

院庁以外の「職」譲状にともなう下文として、承元二（一二〇八）年閏四月二十七日付の「將軍家源実朝家政所下文」をみると、

下 伊予国忽那嶋住人

補任地頭職事

藤原国重

右人、任親父兼平譲状、為彼職、任先例可致沙汰之状、依鎌倉殿仰、下知如件、以下、とあり、「職」の譲与によつてあらためて地頭職の補任をおこなっていることが窺える。

この下文から、新しく「職」の補任をおこなう事態によつて、「職」の譲与が鎌倉幕府（將軍家）によつて公的

に承認されたと捉えることができる。

一二世紀末から一三世紀初頭における「職」の譲与にともなう公的承認・承諾の状況を窺ってきたが、それ以後の「職」の譲与にみる公的な承認の在り方はいかなるものであったかを五つほどの史料を挙げて考えていくことにしよう。

ただ、その前に次のような興味深い史料があるので紹介しておきたい。すなわち、承久二（一二二〇）年十月十四日付の「関東下知状」の

新藤内威定法師孫娘彦熊申伊勢国乙部御厨内乙部郷并越中国小針原荘内静林寺地頭職、代々御下文及手繼讓状紛失事、（下略）

という記述がそれであり、讓状などの証文が資財物とともに盗まれたゆえの紛失であったことがわかる。

さらに、この紛失にともなう関東（鎌倉幕府）における下知状には、単に紛失したことのみならず、地頭職の補任にともなう下文とともに手繼讓状が存在していたことを明示している（この下文には讓状の手繼に関するものが含まれていたと想定し得る）。

このような「職」讓状の状況を留意して、次に一三世紀初頭以後の「職」の譲与にともなう公的承認の在り方を、次に掲げる五つの史料から検討していくことにする。

史料一、貞応二（一二二三）年四月十日付の「関東下知状案」⁽²⁴⁾

可令早源有康為若狭国大井本郷地頭職事

右人、任親父朝親法師之讓状、可為彼職之状、依仰下知如件

史料二、寛元元（一二四三）年七月二十八日付の「將軍藤原家政所下文」⁽²⁵⁾

可令早領知熊野山領相模国愛甲荘・上総国畔蒜南北荘領主職・備中国穗太荘預所并下司兩職事、

「職」をめぐる譲与とその諸要件について

右、任母堂鶴熊今日讓狀、子細載之、為彼職、守先例、可令致沙汰之狀、所仰如件以下、

史料三、文永元（一二六四）年三月十二日付の「將軍宗尊親王家政所下文」⁽²⁶⁾

可令早領知安芸国都宇・竹原兩莊地頭公文檢断并竹原莊惣檢校職、（中略）、讃岐国与田郷地頭・公文・案主・田所・図師・惣檢校・檢断職事

右、任亡父前美作守茂平法師法名本仏正嘉二年七月十九日讓狀、与田郷得分配分事并無男子者可讓与一門中之由載之、可令領掌之狀、所仰如件以下、

史料四、永仁二（一二九四）年二月五日付の「關東下知狀」⁽²⁷⁾

可令早左衛門尉源頼信領知、近江国高嶋本莊付地内案主名并後一条地頭職職□^(事力)

右、任伯母尼妙語正応五年十月廿四日讓狀、可令領掌之狀、依仰下知如件、

史料五、正和元（一二三二）年十二月十六日付の「鎮西下知狀」⁽²⁸⁾

右、訴陳之趣、子細雖多、所詮、如貞朝申者、当村南方地頭職者、亡父阿法得祖母風早禪尼深妙大友豊前、司之能直後家、讓、給關東御下文知行之处、（中略）、南方參町六段之条、備進之狀等分明也、（下略）

史料一から史料五までを掲げて窺えることは、一三世紀から一四世紀に至る間も「職」の讓与に対して、關東下知・將軍家政所下文・鎮西下知による公的な承認を必要としていたことである。

そして、史料一から史料五までをみるかぎり、地頭職（史料一・史料四・史料五）をはじめ、領主職・預所職・下司職（史料二）、さらに公文職・案主職・田所職・図師職・惣檢校職・檢断職といった「職」が讓与対象になっている。

これら以外の「職」の讓与対象は、さきに触れたような「職」（弁済使職や名主職など）の讓与が史料にみられる。⁽²⁹⁾

このように史料一から史料五までと、すでに掲げた史料1から史料3までと、そして史料①から史料⑥までを併せてみるかぎり、「職」讓狀↓「職」讓狀の公的承認（下知狀や下文など）↓公的な「職」付帶・表示という過程を辿ることは大過ないであろう。

言い換えると、地頭職をはじめ、多くの莊園公領における「職」の讓与⇨讓狀は、単に個人的に「職」の讓与を完了させたとしても、その「職」の讓与はかならずしも有効なものではなく、下知狀や下文による公的承認・承諾があつてはじめて「職」の讓与は公的に完了したことになると考えている。

ただ、ここで問題視すべきことは、所領の讓与においても、「職」の讓与と同様な過程を辿るものか、否かである。この点は十分に検討すべき史料の考察に至っていないが、後程その素描を試ることにしたい。

では、「職」の讓与の様相と必然的な公的承認について窺がつてきたが、「職」の讓与において被讓与者の条件（主に統柄）とはいかなるものであつたかを次に「職」讓狀の史料から窺つていくことにしたい。

註

(1) 「職」補任の史料群を検討中であるが、「職」讓与には余り表現されない要件として「器量」の者への補任がある。

(2) 『鎌倉遺文』第一巻、第一六三号文書（以下同様にて、鎌倉遺文一一一六三と略す）

(3) 鎌倉遺文二一九九三

(4) 鎌倉遺文二一〇二〇

(5) 鎌倉遺文六一四一九

(6) 鎌倉遺文一一七八七四

(7) 鎌倉遺文二一一六三三九

(8) 鎌倉遺文一一一七八

(9) 鎌倉遺文二一一〇六

(10) 鎌倉遺文六一三六二一

(11) 鎌倉遺文九一六八〇九

同讓狀にかかわる史料として、宝治元（一二四七）年八月十一日付の「島津忠時安堵狀案」がある（鎌倉遺文九一六八六七）

(12) 鎌倉遺文二一一六一三七

(13) 鎌倉遺文三二一二五〇九六

- (14) 鎌倉遺文三五―二七四四五
(15) 鎌倉遺文三一―一七〇二
(16) 鎌倉遺文一一―七八七〇
(17) 鎌倉遺文一三―九五二〇
(18) 鎌倉遺文二四―一八七八二
(19) 鎌倉遺文三五―二七三九九
同史料の元応二(一二三二)年三月十日付の「尼尊信領家職讓狀」には「讓渡 越中国堀江荘内大力開発領家職事」とある。
- (20) 鎌倉遺文三七―二八四四九
同史料の元享三(一二三三)年七月二日付の「行弘田地作所職放狀」には「彼ノ所当米等ヲ、皆奉弁進之間、永所奉讓此作所職ヲ也」とある。
- (21) 鎌倉遺文二―一〇二〇
(22) 鎌倉遺文三一―一七四〇
(23) 鎌倉遺文四―二六五七
(24) 鎌倉遺文六―三〇八四
(25) 鎌倉遺文九―六二〇七
(26) 鎌倉遺文一二―九〇六一
- (27) 鎌倉遺文二四―一八四七三
(28) 鎌倉遺文三二―二四七四〇
(29) 弁済使職の讓狀を掲げると、正元元(一二五九)年十二月十九日付の「尼深妙讓狀」に「をなしくひんきに付けて、くたんのへんさいしきをハ、御へんにゆつりたてまつるところ也、たのさまたけなく、ちきやうさせ給へく候」とあり、勝津留弁済使職を買い取つて後にこの「職」を讓与したことが窺える(この讓狀から、地頭職も買い取つた後に讓与していることもわかる(『鎌倉遺文』第一卷、八四五〇号文書)
- また、名主職の讓与に関する史料を挙げると、弘安五(一二八二)年三月十一日付の「大藏家忠申狀」に「副進 讓狀案文」件名主職者、自祖母道阿弥陀仏之手、宝治元年五月五日被讓与家忠畢、早任彼讓狀、賜安堵御下文」とあり、宝治二(一二四八)年に名主職を讓与されていたことと、この「職」讓狀に任せて「職」安堵の下文を賜わたことが窺える(『鎌倉遺文』第一九卷、一四五九〇号文書)。

第二章 「職」讓狀にみる被讓与者の条件

讓与における「職」の様相と「職」の讓与に公的な承認の存在を窺ってきたが、「職」を讓与する側の讓与される者に対する条件とはいかなるものであつたかは、「職」の讓与にとつて重要な事柄であつたと考えられる。

言い換えると、被讓与者の条件で主なものは、夫婦・親・子・孫・兄弟・姉妹・師弟などの関係と考えられるいわゆる続柄であろう。

「職」の讓与における被讓与者の条件について、とりわけ続柄に視点をあてて次に窺っていくことにしよう。

まず、すでに触れた文治二（一一八六）年八月 日付の「山氏女讓状案」には、「為預所之職、数十年知行畢、法橋逝去之刻、令讓与後家、後家又讓与孫女子」とあり、伊賀法橋が死去の折に、後家（法橋の妻であろう）に預所職が讓与されたが、その後後家の孫娘に讓られた。また、この讓状案には、孫娘から縁者などへ移り、預所職寄進にともない中納言法橋は下司地頭職の付帶者へ移行して後に山氏女が嫡女に讓与したことを述べている。

山氏女の讓状から、伊賀法橋Ⅱ夫↓妻（後家）↓孫娘という讓与経緯と、中納言法橋Ⅱ夫？↓山氏女↓嫡女Ⅱ娘という讓与の経由がわかる。しかし、伊賀法橋の孫娘と中納言法橋および山氏女との繋りは明確ではない。ただ、伊賀法橋の讓与の経緯では、法橋の血縁者であることは確かであり、山氏女の讓与経緯をみると血縁者であるといえる。

このように親・子・孫および夫婦の血縁関係の「職」の讓与は数多い。次に時期を考慮しながら、六つほど挙げることにしよう。

史料A、建保五（一二一七）年三月五日付の「平秀忠讓状」^②

右、秀忠之父讓状称、於山門院郡司職者、依為嫡子、秀忠讓与了、（下略）、

史料B、寛喜元（一二二九）年七月十九日付の「將軍藤原賴經袖判下文」^③

下 藤原氏字^{子九}

可早領知常陸国真壁郡山田郷地頭職事

右人、任夫友幹法師。今月十四日讓状、可安堵也、兼又氏子一期之後者、守彼状、

葉王丸相加丹後国五箇保、可知行之状如件、

史料C、寛元二（一二四四）年七月 日付の「勸学院政所下文案」^④

可早令左衛門少尉藤原時長為当莊公文職事

右人、任親父時佐法師讓状、宜為彼職之状、依長者宣、所仰如件、（下略）

史料D、建長六（一二五四）年十一月五日付の「將軍^{宗尊}親王家政所下文案」^⑤

可令早左衛門尉滋野経氏為地頭職事

右、任親父田中四郎光氏去寛元々年十月六日讓状^{面々分除、子細載之}為彼職、守先例、可致沙汰之状、所仰如件、以下、

史料E、弘安十年（一二八七）年九月八日付の「道心^{兼定御神木}地頭職讓状案」^⑥

讓与・嫡子次郎時兼

先祖相伝所領周久満郷地頭職事

右、件久満郷ハ、せんそさうてんのしりやう也、（下略）

史料F、正和二（一一三三）年十一月二十三日付の「相馬通胤讓状」^⑦

在陸奥国行方郡内大悲山村・^{（同小嶋）}□□□田村并竹城保内長田村内蒔田屋敷地頭^{（職事）}□□

右、件所者、通胤か重代相伝之所領也、しかるを、子息^{（孫）}□次郎行胤に、両度の御下文をそゑて、讓渡所也、但

妹鶴夜叉に讓渡長田村内蒔田者、（中略）、永代おかきりて、讓渡所也、（下略）

史料Aから史料Fまでをみるかぎり（傍点―奥野、以下同様にて略す）、父親から嫡子あるいは子息に「職」を讓与していること（史料A、史料C、史料D、史料E、史料F）、夫から妻に「職」を讓与していることが窺える。

親から子へ、また夫から妻へと「職」を讓与する以外にも、次のような関係で「職」を讓与していることが史料からわかる。すなわち、建暦二（一二二二）年四月九日付の「平家貞讓状」をみると、

在近江国蒲生上郡麻生莊公文職

右、件所職田島等者、平家貞重代相伝之私領也、而沈痛床之刻、僧覺尊仁限永代所讓与実正也、(下略)
とあり、平家貞が所領と「職」を僧覺尊に讓与していることが窺える。ただ、いかなる関係で讓与したかは明確でない。

また、少し時期が遡るが、正治二(一二〇〇)年正月 日付の「藤原為教讓状」の讓与

萱嶋御莊下司并惣公文職事

藤原能村

右人、讓与件等職実正也、抑於此兩職者、為教先祖相伝之職、敢無相違、(中略)、然而、於今者令及老耄、動被侵病痼、爰依事縁、以件兩職隨讓与于彼能村了、(下略)、

という記載から、萱嶋莊の下司職・惣公文職付帯者の藤原為教は、自らの老令化にともなつて「事縁」のある藤原能村に「職」を讓与したのであるが、血縁者であるのか、否かも明確ではない。ただ、何らかの有縁の人物である藤原能村に讓与したことは確かであろう。

さらに、永仁六(一二九八)年十月十日付の「性円文書讓状」をみると、

讓渡 大井莊下司職文書事

鶴菊殿

右、件所識者、沙弥性円重代相伝之所帶也、依之、代々本所下文以下手繼取帳目錄等之証文等、不殘一紙、讓渡鶴菊殿者也、全不可悔返之儀、且又不可成子息等并他人之妨、性円之外、無他領主之故也、(下略)

とあり、性円は子息ではなく、「鶴菊殿」へ下司職(関連文書)を讓与していることが窺える。そして、この下司

職の讓与には、讓与にともなう「悔返」があつてはいけないことと、「仍為後日証文、載加子息之判形」という文言にみるように「職」の讓与の証文に加判させていることがわかる。

しかし、この性円の「職」の讓与の相手である鶴菊なる人物が、性円とどのような関係者であつたかは明確ではない。確かなことは、性円の子息の一人でないことである。

言い換えると、性円と血縁関係にある人物であつたことは想定しがたいが、直系親族でないことは確かであろう。このように、「職」の讓与において、数多くは親・子・孫か、夫・妻の血族関係者によるが、「職」を讓与する者と讓与される者との関係は、有縁の人たちであると考えられなくはない。そして「有縁の人」の詳細は「職」讓状および「職」の讓与に関する下文・下知状からも窺えない。

「職」の讓与で明確にしがたい事象として、さきに触れた親・子・孫あるいは夫・妻などの親族や婚姻関係にみる「職」の讓与においても、親から子へ、子から孫へという連続した讓与形態は史料からほとんど見出し得ない。

ただ、連続した「職」の讓与が想定し得る史料として、正治元（一一九九）年のものと考えられている「豊後都甲莊地頭次第注文」を挙げることができよう。すなわち、

豊後国内都甲浦地頭職次第等事

初開発源。經俊。字左近大夫。

次大神貞正。經俊。女子夫。山香郷司。字八手四郎郷司。

次大神貞門。貞正男。經俊孫。山香郷司。

次大神貞家。貞門男。經俊玄孫。同郷司。

次大神家忠。貞家男。同郷司。

次大神家実。家忠二男。宇都甲四郎。

次大神惟家家実男

右、■経俊開発領掌之後、自貞正請次以来至于惟家、敢不交異性他族、無相違所令知行来也者、注進如件

という記述がそれであり、地頭職の(相承)次第であるが、源経俊↓大神貞正(経俊の女「娘」の夫)↓大神貞門

(貞正の男「子息・経俊孫」)↓大神貞家(貞門の男「子息・経俊曾孫」)↓大神家忠(貞家の男「子息・経俊曾孫

の子」)↓大神家実(家忠の二男「子孫・経俊の曾々孫の子」)↓大神惟家(家実の男「経俊の曾々孫の子の子」)

と「職」の譲与がおこなわれたと考えられる。

そして、この地頭次第注文から、姻戚関係から親族へ「職」が譲与されていく基盤には、〈異性他族〉の交わら

ないことを明示していることが窺える。この「不交異性他族」という文言からは、直系親族による統柄が基本であ

ったことを暗示させる。

したがって、親族を基本に「職」の譲与がおこなわれていた事実とともに、何らかの有縁者によって「職」の譲与が継続されていく事象が存在していたと考えるべきであろう。

そこに「職」の譲与の条件として統柄・族制が存在し、譲与の基本型があつたと想定し得るのである。

では、「職」の譲与における条件が満たされるとすれば、どの時点で「職」の譲与は完結するのであろうか。

次に「職」をめぐる譲与時期はいつ頃であり、譲与が完結されるのかをみていくことにしよう。

註

- (1) 『鎌倉遺文』第一巻、第一六三号文書(以下同様にて、鎌倉遺文一―一六三と略す)
- (2) 鎌倉遺文四―二二九四
- (3) 鎌倉遺文六―三八四七
- (4) 鎌倉遺文九―六三五五
- (5) 鎌倉遺文一―七八一八
- (6) 鎌倉遺文二―一六三三九
- (7) 鎌倉遺文三―二五〇四二
- (8) 鎌倉遺文四―一九二五

(9) 鎌倉遺文二一一一〇六

正治二(一二〇〇)年二月十日付の「石清水八幡宮寺政所下文」には、

宮寺政所下 萱島莊
補任下司職事

藤原能村

右人、補任西莊下司職如件、莊宮寺宜承知、依件田之、以下

とあり(鎌倉遺文二一一一〇七)、藤原能村が下司職に補任されている。同年一月に藤原為教から「職」が譲与されて後、二月に石清水八幡宮寺から下司職が能村に補任されている。この「職」補任の史料と「職」讓狀から譲与後、直ちに「職」の譲与が承認されて、下司職が補任されたことが理解し得る。

(10) 鎌倉遺文二六一一九八四七

(11) 親・子・孫の血族関係で、祖母―孫の関係で「職」を

譲与する事象もみられる。

たとえば、嘉祿二(一二二六)年九月十五日付の「將軍藤原賴經下文」に「任祖母尼貞応三年改元元仁正月二十九日讓、補任彼之狀」とある(鎌倉遺文五―三三二四)。

また同様に寛元二(一二四四)年八月十八日付の「將軍藤原頼朝？袖判下文」にも「任養祖母今年七月十九日讓狀、(割註略)為彼職、守先例可被沙汰之狀」とある(鎌倉遺文九―六三六二)。

(12) 鎌倉遺文二一一〇九一

同様な史料に「豊後都甲莊地次第注文」(同正治二年のものと考えられている)があり、本文掲載の「豊後都甲莊地頭次第注文」と異なる箇所は、「つぎにこれちか惟家子息註奥野／これいへかしそく」という文言であり、「地頭次第注文」にみえる「次大神惟家家忠男」以後の相承の記載である(鎌倉遺文二一一〇九二)。

第三章 「職」の讓狀にみる譲与時期

所領の田畠や資財の譲与の時期には、死亡後の時期であるとする三浦周行説と、生前中の時期あるいは死亡後の時期とする中田薫説があり、二説に分かれて現在に至るのであるが、「職」の譲与においては、死後譲与であるのか、生前譲与であるのか、さらに生前と死後の両方の譲与があるのかを、ここで「職」の譲与関係の史料を再び検討していくことにしよう。

すでに前述してきた中で挙げた史料においても記載されている「職」の譲与には、生前の譲与がみられる。たとえば、下司職と公文職の譲与として、正治二（一一〇〇）年正月 日付の「藤原為教譲状」でみた「於今者令及老耄、動被病痾、爰依有事縁、以件両職髓譲与于彼能村了」という記載を挙げることができる。^③そして、同年二月十日付の「石清水八幡宮寺政所下文」の「右人、補任西荘下司職如件」という文言と併せて考えられることは、正治二年正月に「職」を譲与して、同年二月に下文によって「職」補任が承認されている事象から、藤原為教（譲与者）は老齢化と病魔に侵されていることを理由に藤原能村（被譲与者）へ下司職を譲与した（公文職も譲与されて公的承認は得られたと想定し得るが、下文がないので明確にできない）。

この藤原為教の「職」の譲与と同様に、老齢あるいは病身のわが身を顧みて「職」を近親（肉親）者へ譲与する事例は少なくない。次にその事例を五つほど紹介することにする。

史料①、文治二（一一八六）年九月二十三日付の「平宗家譲状」^⑤

譲渡・麻生公文職・屋敷等事

右件所職者、平宗家先祖相伝之私領也、而病悩之尅、嫡男・宗・貞・仁・永・代・譲・渡・進・早、（下略）

史料②、承元二（一一〇八）年七月 日付の「尋覚譲状案」^⑥

譲与 先祖十五代相伝所領小値賀嶋本領・主・地・頭・職・事

（中略）

右、件嶋者、尋覚之先祖十五代相伝所領、証文明鏡也、爰・尋・覚・之・齡・已・及・八・旬・之・命・間、嫡・男・藤・原・通・高・相・副・調・度・証・文、所・譲・渡・実・也、（下略）

史料③、安貞二（一二二八）年七月十三日付の「藤原孝道譲状案」^⑦

譲渡 攝津国大島省部莊所預職事

〔預所カ註典野〕

「職」をめぐる譲与とその諸要件について

藤原氏播磨局

孝道朝臣讓女子播磨局狀案

右莊 去嘉祿二年八月二十三日、依受重病、為後家安穩、讓散位孝時之由、雖書渡契狀、未及莊務、而彼孝時

以不得心、(中略)、仍已成不孝之思、悔返所讓播磨局也、(下略)、

史料③から史料⑥までをみるかぎり(傍点―奥野、以下同様にて略す)、病に悩む時期あるいは重病のために「職」を譲与する場合(史料①・史料②)、余命いくばくもないために「職」を譲与する場合(史料③)の二形態があり、いずれも生前(存生)の「職」の譲与であることが窺える。

同様に生前の「職」譲与の範疇に加えることができるものに一期後の「職」の譲与があり、次に史料を三つ掲げることによしう。

史料④、文永四(一二六七)年十二月十九日付の「関東下知狀」

可令早大炊助長久領知和泉国上条五箇里・(中略)・満家院等地頭職事

右、任親父前大隈守忠時法師法名道弘文永二年六月二日・同三年十月十日・今月三日讓狀等、満家院者母一期之後可令知行之由載之

領掌之狀、依下知如件、

史料⑤、建治二(一二七六)年八月三日付の「平氏讓狀」

越後国小泉莊牛屋条内作道以東地頭職事、

(四至等略)

右、所讓与子息若童丸也、たのさまたけなく、任先列例可令領知也、(中略)、後家一この程ハ、彼名田にいろうへからす、一この後ハ、わかとう領知せしむへし、(下略)、

史料⑥、永仁三(一二九五)年三月二十九日付の「慈善山内首藤時通讓狀」

讓渡・所領事

合・四・所・者　嫡・子・弥・三・郎・通・網・所

一 所　備前国地毗莊内本郷并公文職、かう山のもんてんの地頭職事、

一 所　攝津国富嶋莊地頭職并下司・公文名地頭職事

但自此所每年米拾石庄屋
器物定、尼御前一期之程者、可沙汰進、(下略)

史料⑧　正中二(一二三五)年二月八日付の「大見資家讓狀」

讓渡

越後国白河莊安田条并同莊下条山浦湯川□内次郎丸・(中略)、美濃国蘇原莊内則友名地頭職事、

右、所・彦・平・次・資・宗・仁・代々御下文讓狀等相副天、永代所讓渡実也、(中略)、又資家妹孫王・号木津女房女知行分、任本主

之讓狀、一期之後者、惣領資宗可令知行之、(下略)

史料⑨から⑧までの「職」の讓与の状況をみるかぎり、所領と「職」とを讓ることが明示されている。また、一期の間は被讓与者以外が所領と「職」を知行し、一期の後には本来の被讓与者が領掌と「職」を領知することを記載している。

一期の後の讓与の中でも、「職」(所領も含めて)の讓狀が、文永二年六月二日、文永三年十月十日、文永四年十二月三日の三回にわたって出されている事象に興味をひく(史料⑩)。そして「職」(所領も含めて)の讓与と下文が代々存在し、これら相副えて譲り渡されている事実は、「職」讓狀↓「職」下文・下知狀の不可欠の關係を示してくれる(史料⑧)。

これらの「職」の讓与における一期の後の讓与・領掌は、「職」(所領も含まれるが)の生前讓与を明示する。

では、「職」の讓与には、生前(存生)讓与のみが存在するのであろうか。次にこの点を「職」の讓与の史料から、死亡後の讓与の有無を考えていくことにしよう。

ただ、すでに文治二（一一八六）年八月 日付の「山氏女讓状案」で触れたように「法橋逝去之刻、令讓与後家」という文言から、讓与者の死去の時期に「職」を讓与していたことが窺えるのである。しかし、この讓状案のみでは、死亡時点での「職」の讓与が明示されているが、この事象は同讓状案での特殊性によるものとも捉え得るかもしれない。

そこで、次に死後（死亡時）の「職」の讓与にかかわる三つの事例史料を掲げることにした。

史料⑦、嘉祿三（一二二七）年五月七日付の「北条泰時袖加判下文」¹⁴

下 石見国久留原別符住人

可早以弥四郎盛家令安堵地頭職事

右人、為彼職、亡父資盛時之例、可致沙汰状、所仰如件、以下、

史料⑧、宝治元（一二四七）年五月六日付の「將軍藤原頼嗣袖判下文」¹⁵

下 日置有基

可令早領知出雲国大野莊内名田員數坪付地頭職事

右、任亡父有忠去年七月三日讓状并式通注文、百姓名地頭名為彼職、守先例、可致沙汰之状如件、

史料⑨、文永三（一二六六）年四月七日付の「善阿弥陀仏地主職讓状」¹⁶

讓進 重代相伝所領東寺御領田地主職事

（中略）

件所領田者、自亡父盛円之所讓得也、相伝子細見于本券状、（下略）

史料⑦・史料⑧・史料⑨にみえる「任亡父」「自亡父」と「讓状」「讓進」という文言から、あたかも死亡後の「職」の讓与が容易に理解し得るように考えられる。

しかし、「亡父資盛之例」(史料⑦)、「任亡父有忠去年七月三日讓状」(史料⑧)、そして「自亡父盛円之所讓得」(史料⑨)の文言を「現時点では死亡している譲与者」から「生前(生存)に譲与された『職』」という理解も成り立つ。

史料⑦から史料⑨までの記載をみるかぎり、死後(死亡時点)の「職」の譲与と読み取りがたいという問題が提起されよう。

言い換えると、「職」の譲与において、生前(生存)の譲与が通常の形態であり、さきに触れた文治二(一一八六)年の「山氏女讓状案」にみえる「法橋逝去之刻、令譲与後家」という記載は特殊な情況の中で成立した死後の「職」の譲与であつたのであろうか。

「職」の譲与が生前(生存)であるのか、死後(死去時点)であるのかのいずれかを判断させる史料は、現段階ではほとんど検出できないが、生前あるいは死後の「職」の譲与のいずれかを示唆させる一史料が現存している。すなわち、元亨四(一一三四)年十一月二十三日付の「関東下知状案」にみえる地頭職にかかわる相論であるが、「職」の譲与を明示する記載があり、その詳細を挙げると、

右、光員遺領者、④正応元年十一月二日分讓光頼、⑤同三年七月二十八日死去畢、而於彼所、者、光頼相伝^(令子)□知行之条、讓状炳焉之處、致謀書之上者、為未処分所領配分之旨、員連正安年中及訴訟、(中略)、召決両方畢、相互申詞雖多枝葉、所詮、⑥光員正応三年七月二十八日令死去之条、各無異論、經所一箇年員及未処分訴訟、(中略)、就中、⑦正応元年者光員無病平生也、難及讓状沙汰、如状者、不載位署、加判形計畢、旁為謀書之由、(中略)、或無病之時書与讓状之条、為常習之上、宜為主素意之間、敢不能其難、加之、執筆大輔阿闍梨愛実者、光員向背之仁也、讓状難執筆之由、員連亦雖称之、於光員召仕之比者、承伏訖、(中略)、棄置員連之訴訟、任讓状、光頼知行不可有相違、(下略)

とあり（傍線―奥野¹⁷）、長文に亘ったが、光員は正応元年に光頼に譲与したこと（④）、譲与期の正応元年には光員は無病平生の情況であつたこと（⑤）、そしてその光員は正応三年七月二十八日に死去していること（⑥⑦）から、光員の遺領と明示されている所領と地頭職は、光員の存生時に譲与されていたことになる。

そして、同下知状案にみえる光員は、すでに正応元年に「職」（所領も含めて）の譲状を光頼に与えていたことになり、「無病之時書与譲状」ことは「常習」のことであつたゆえであろう。

したがって、この下知状案によるかぎり、譲与者の光員は正応三年に死去する以前の正応元年に、無病平生（病氣にも侵されず平生の心身状況）で譲状を執筆して、被譲与者の光頼に「職」（所領も含む）の譲与をおこなつていたことになり、「職」の譲与は生前（生存）の時期に成立していたことになる。

このように「職」の譲与の時期を理解するならば、さきの文治二（一一八六）年の「山氏女譲状案」の「法橋逝去之刻、令譲与後家」の文言は、法橋の逝去にともなつてすでに存在していた譲状の譲与が完了したことを明示したものであるとも解釈でき、死去後（死去時点）の「職」の譲与という特殊なものでなかつたと考えられる。

言い換えると、「職」（所領も含む）の譲与には、生前（生存）の譲状作成後に譲与は完成するときと、生前（生存）の譲状作成後に譲与されずに死去後に譲与は完了するときがあつたと考えるべきであろう。つまり「職」の譲与には、生前（生存）の譲状作成（遺言作成ともいえる）で開始し、生前に完了する場合と死後に完了する場合とが存在していたといえよう。

註

（一）三浦周行「親子関係を中心としての家族制度」（『法制

史研究』所収）

（二）中田薫「中世の財産相続法」（『法制史論集』第一巻所収）

（三）『鎌倉遺文』第二巻、第一一〇六号文書（以下同様に

て、鎌倉遺文二一一〇六と略す

(4) 鎌倉遺文二一一〇七

(5) 鎌倉遺文一一一七八

(6) 鎌倉遺文三一七五四

(7) 鎌倉遺文六一三七六六

(8) 生前つまり存生時に「職」(所領も含める)の譲与を明示する史料があり、次に挙げておく。
承元三(一二〇九)年七月二十八日付の「將軍源実家家政所下文案」の

右、当村田畠山野等二親存生之時、相分半分譲与行

西之处、氏主背彼讓状、(中略)、早停止氏主之妨、可令行西地頭職、(下略)

という記載がそれであり、父母存生の時に「職」(所領も含む)の譲与をおこなっていたことが窺える(鎌倉遺文三一七九七)。

(9) 鎌倉遺文一三一九八二三

(10) 鎌倉遺文一六一二四三九

(11) 鎌倉遺文二四一一八七九〇

(12) 鎌倉遺文三七一二八九九五

「職」の譲与で一期の後に譲ることが明示されている以外に、讓状の偽書について記載している史料がある。

すなわち、弘安十(一二八七)年五月二日付の「相良迎蓮俊頼讓状」の「豊前国上毛郡内成恒名地頭職事」に関する記述に、

右、当名ハ、宝治勲功の地也、(中略)、蓮仏かうれ

んにゆつりあてらるゝ、建長三年三月二十二日次第手繼の証文等

をあいそゑて、永代おかきツて、ゆつりわたすところなり、(中略)、子息等の讓状皆同日一筆なり、若

このほかハ、ゆつりしやうありと申ともからあらハ、謀書とすべし、(下略)

とあり、正式な讓状のほかに讓状はなく、もしあれば「謀書」とすると明示している(鎌倉遺文二一一六二五三)。

(13) 鎌倉遺文一一一六三

(14) 鎌倉遺文六一三六〇八

(15) 鎌倉遺文九一六八二六

(16) 鎌倉遺文一三一九五二〇

(17) 鎌倉遺文三七一二八八八八

この下知状案にも「謀書」云々の文言がみえ、正式に認知された讓状以外の書状(偽書状)を指すことがわかる。

(18) 鎌倉遺文一一一六三

付論―所領の讓与について

「職」をめぐる讓与において、さまざまな「職」の存在とその讓与にみる公的承認、「職」の讓与者と被讓与者との関係、そして「職」の讓与時期などを検討してきたが、その過程で、「職」のみならず所領の田畠山野などをもなった讓与においても「職」の讓与と同様な状況を示していることが窺えた。すなわち、すでに掲げたが、建暦二（一二二二）年四月九日付の「平家貞讓狀」にみえる「讓与先祖相伝私領所職名田畠等事」「在近江国蒲生上郡麻生莊公文職」「僧覺尊仁限永代、所讓与実正也」という文言から、私領と所職＝公文職を「沈病床」の時期に僧覺尊に讓与したことがわかる。¹⁾

この「職」および所領の讓与では、公文職と名田畠を平貞家は、親類縁者という明示がない僧覺尊に讓るが、貞家が病床にあるゆえの譲りであることから、貞家の生前（存生）での処置であつたことになる。

讓与者と被讓与者との関係が親・子・孫の親属関係については、すでに触れた史料以外にもいくつかあるが、その一例を次に挙げてみることにしよう。すなわち、寛喜二（一二三〇）年二月二十日付の「小山朝政讓狀案」をみると、

讓渡 生西所領所職事

嫡孫五郎長村分

合

一 下野国

權大介職

寒河御厨号小山莊、重代屋敷也、

(中略)

一 播磨国

守護奉行職

高岡荘

高岡北条郷

右、件・所領・所職等、云生西重代相伝、(中略)、然嫡男左衛門尉朝長存生時、讓与之處、早世畢、然朝長子息之中、以五郎長村立嫡男、可令相継家業之由、平生之時令計畫畢、仍任其趣、為長村嫡々相承、件・所領・所職等、(中略)、以所讓与也、但生西一期之間、可進退知行也、於没後者、任讓状、無他妨、長村可令領掌知行之状、

所讓渡如件、

とあり^②(傍点・傍線―奥野、以下同様にて略す)、小山朝政は嫡男朝長に「職」および所領(所領所職)を讓与するが、朝長の早世によつて朝長の子息から長村に家業(家督)ならびに所領所職を讓与する。ただ、生西一期の間は自身が知行し、生西死後にすでに作成済みの讓状にしたがつて、長村に「職」および所領を讓与・知行せしめることが明示されている。

また、この讓状案には、すでに「職」の讓与の時期(生前〔生存〕あるいは死去の時点)について論及したように、生前(生存)時に讓状作成し、死去時点に「職」の讓与の効力が発動されるという視点の確かさが「於没後者、任讓状、(中略)、所讓渡如件」という文言に提示されている。

さらに、亡親父より讓得るといふいくつかの史料は、親父の死後において讓与が完了したことを意味することも理解し得る。たとえば、弘長二(一二六二)年八月三十日付の「詫磨能秀讓状案」をみると、「讓与 相伝所領等地頭以下所職事」は、「自亡父豊前々司能直之手、讓得之^③」というものであり、さらに讓得した能秀はさらに子息

の直秀に譲与したのであるが、能秀の譲与の状況下では、父親が死去した後、所領所職を譲与されたのではなく、父親の死去によつて譲与が完結したといえる。

このように所領所職つまり所領と「職」の譲与は、譲与者の生前（生存）の時期におこなわれる前提としての「譲状」の作成があり、「譲状」を基盤に譲与者の死去後に実現されると考えるべきであり、この生前の「譲状」作成は、小山朝政の譲状案においても明示されているように一般的には「平生之時」におこなわれていたといえる。ただ、「平生」でない時点である「病床」「悩悩」「老耄」などの時点においても「譲状」は作成されていたとみるべきかもしれない。

このような「譲状」作成の状況が存在するゆえに「悔返」の事象が生まれるという想定は妥当であり、生前（生存）ゆえに成り立つ事象であるといえよう。すなわち、弘安二（一二七九）年卯月三十日付の「託磨長秀譲状案」にみる所領の譲与にも

譲与 やすなかつたところに

さかみのくに大友郷内てんち五段〔田地〕行連〔運力〕房〔運力〕・坊城阿弥陀仏跡三段、い上五段定、

（中 略）

〔あ脱カ―註奥野〕

さきに、ますつるにたひて候し状ハ、みなわるく候あひた、くひかへして、わけてかようにたひ候もの也、以

上

とあり、すでに与えた「状」（譲状であろう）を「くひかへして」相分して所領を与えたことが明示されている。

「悔返」という事象は、所領（あるいは「職」||所職）の譲状を作成した譲与者が生前（生存）時点でおこなえるものであり、譲状における譲与内容を改めて再度譲状を作成したことを想定させてくれる。ゆえに、譲状作成と譲与完結の時期は当然喰い違いをみせるであろう。悔返によつて譲与の時期的差が生じる以外にも、次のような情

況でも時期的差はみられる。すなわち、弘安十（一二八七）年十月八日付の「関東下知状」の

可早以平氏^{字摩尼}領知越後国白河荘内米王丸名田^{母一期之後并同紀宗追名田事}

右、任亡父大見肥後民部大夫行定法師^{法名、安}六年四月五日讓状、可令領掌之状、依仰下知如件

とあり、名田を讓得して下知される以前の弘安六年四月五日に讓状は存在して、名田の内母一期の後に讓与されることから、当然所領の実際の領掌は讓状作成以後となる。

このことは、すでに「職」の讓与においても「亡父」「亡親父」の讓状という文言のある史料を掲げたので、所領の讓与も「職」の讓与と同じ基盤に立つて考えられるものと理解している。

したがって、所領の讓与においても、讓与の対象者、讓与の時期、そして讓与（讓状というべきか）の公的承認の必要性などは、「職」における讓与と同様の存在形態を現わすものであらうと素描しておきたい。

したがって、「職」の讓与における課題とともに、所領の讓与にみる問題も併せて提起して結びとしたい。

註

(1) 『鎌倉遺文』第四卷、第一九二五号文書（以下同様に、鎌倉遺文四一一九二五と略す）

(2) 鎌倉遺文六一三九六〇

(3) 鎌倉遺文二一八八六五

(4) 鎌倉遺文一八一三五七

(5) 「職」の讓与において、「悔返」にかかわる史料は数多いとはいえないが、「充行状」にもみられるので、次に一例を挙げることにしよう。

(6) 鎌倉遺文二一一六三五六

建曆元（一二一一）年八月四日付の「東大寺充行状」に
右、件下司職者、康則存生之時、雖相伝養子奉則、
触事不忠不義、悉背約束旨之間、後家尼生蓮悔返之、
所宛賜于実子次女也、而彼朋友依為夫婦之儀、補
任已畢、

とあり、不忠・不義によつて「悔返」がおこなわれ、下司職は充行われなかったことを示す（鎌倉遺文四一一八八七）。

結びにかえて

「職」の譲与の究明で、「職」の譲状は下知状や下文などの公的承認を得ることによって、「職」の譲りが完結できること、「職」の譲状に現われる譲与条件としての親類縁者や有縁者などの続柄と非続柄を含んで「職」の譲がおこなわれること、そして「職」の譲状にみえる譲与の時期、つまり生前（生存）の譲与が通常の形態であり、これに加えて、死後の譲与も史料に現われることを提示してきたつもりである。

さらに、「職」の譲与が完結される過程を想定して、「職」（所領も含めて）の譲与で最初に生前（生存）中に譲状が作成され、次に譲与の死去にともなつて、「職」の譲与は公的な承認を得ることによって、「職」の譲与は（譲状）に基づいて完結されることも指摘したつもりである。

ただ、これらの譲与にかかわる事象の内、中田薫氏が行論されている「死因譲与」⁽¹⁾とも考えられる譲与者の「逝去之刻」⁽²⁾の譲与について充分に史料を検討し得なかつたことは、「職」の譲与における死去譲与の是非を問えなかつた一因をもちたらしいといえる。

多くの「職」にかかわる史料は、「亡父」「亡親父」「亡祖母」などという文言から、あたかも死後の譲与を想定させるが、その大半の史料は、下文や下知状などの公的承認を得た（譲状）であつたと考えている。

したがつて、所領の譲与も含まれるが、とくにここでの課題として、中田薫氏の論及された「死因譲与（遺言）」の存否の究明があろう。⁽³⁾なぜならば、すでに明示したいわゆる「死因譲与」が史料に現われるかぎり、単に特殊性として処理し得るかは問題であらう（「死因譲与」と称するよりも「遺言譲与」と呼称したほうが良いかもしれない）。

また、「職」の譲与におけるいくつかの史料に二・三の年月日が並記された譲状は、その時期／＼に作成された

ものと想定したいが、年月日並記の讓状における讓与者の意図はどのようなものであったのかも課題である（おそらく「悔返」と関連する意図と想定できるが）。しかし、このような事象はかならずしも数多く史料に現われないところに課題を解決する糸口があるかもしれない。

このような課題は、「職」の讓与にとどまらず、所領の讓与にも現われるであろうと想定し得る。田畠山野や家屋（屋敷）などを含む〈所領〉の讓与については、後日検討していくことにしたいが、「職」の讓与をめぐる「悔返」にみる讓状の課題を提起して結びにかえたい。

註

(1)～(3) 中田薫「中世の財産相続」(『法制史論集』第一集所収)

